



昭和4年、県立水産学校を卒業した時の鈴木善幸氏（前列中央）
＝写真提供・県立宮古水産高校同窓会「岩水会」＝

県立水産学校時代の
善幸さんを知る

阿部政哉さん
(川向町・90歳)



優等生でスポーツマンだった善幸さんはわたしたちの憧れの的で、後ろを「善幸さん、善幸さん」と慕う子供たちが追いかけて歩いたものでした。テニスのキャプテンや弁論の主将も務める一方、成績も優秀だったので「善幸はいつ勉強しているんだ」と言われていたそうです。親戚だったこともあり、善幸さんにはいつも気にかけていただいて、小学校を卒業するときには東京から手紙が送られてきました。友達に自慢しようと見せたら、取り合いになっていたの間になくなってしまうことが思い出されますよ。

貧困の原因が現在の漁業体系にあると考えた善幸氏は、漁協制度を改革しなければならいと考え、漁協運動に身を投じて貧しい漁民の実情を訴えました。水産講習所を卒業した善幸氏は大日本水産会、全漁連を経て中央水産業会に移り、同会の廃止問題で労働組合の委員長として活躍しました。しかし、活動が続ける中で道路や漁業関連施設の整備、燃料となる石油の供給などといったところで政治の力の必要性に直面し、漁協運動の限界を痛感します。そこで善幸氏は政治の世界へ進むことを決意したのでした。

昭和8年の三陸大津波の惨状



東京海洋大学）に進学しましたが、在学中、善幸氏は自らの将来を大きく決定付けられる出来事に遭遇することになります。

**昭和8年の「三陸津波」が
鈴木青年の運命を変えた**

同年3月3日、釜石沖を震源とする三陸地震が発生し、巨大な津波が本町をはじめとした三陸沿岸に襲い掛かりました。この津波による被害は上閉伊郡、下閉伊郡、気仙郡、九戸郡の4郡合わせて死者1408人、行方不明者1263人、家屋流出2969戸、焼失250戸、船の流出6768隻（山田町津波

誌）にも上り、本町も大変な被害を受けました。

このとき善幸氏はたまたま山田に帰省していたところで、家族と命からがら高台へ避難。その後被害に遭った個所を巡り、その惨状を目の当たりにします。不況と深刻な生活苦に苦しんでいたところへ、この大災害でさらに追い打ちをかけられることとなった三陸沿岸の漁村。善幸氏は漁村を何とかしたい、郷土のために何かできないかという思いから、政治の世界を意識し始めるようになります。

**漁協運動に情熱を注ぐも
限界を感じ政治の世界へ**

鈴木善幸氏は、明治44年1月11日、鈴木善五郎・ひさ夫妻の長男として大きな網元の家に生まれました。

善幸氏は山田尋常小学校から県立水産学校（現・宮古水産高校）へと進学。当時の三陸沿岸漁村は、どこも戦後の不景気と

不漁続きで貧しい生活を送っており、鈴木家も決して裕福な暮らしではありませんでした。

学生時代の善幸氏は「秀才」とあだ名が付くほど成績は常にトップクラスで、テニスにも励む文武両道の青年でした。

その後農林省水産講習所（現



幼少期の鈴木善幸氏＝写真提供・鈴木俊一事務所＝

時は明治末期にさかのぼります。三陸沿岸の漁村は戦後の不況や不漁、自然災害の影響を受け、貧しい生活を余儀なくされていました。苦しい生活を強いられ続ける漁村の窮状を見かねて、本町から1人の青年が立ち上がりました。青年は漁民の実情を訴え、漁協運動に身を投じますが、やがてその活動に限界を感じ、政治の世界を志すようになります――。

漁協運動から政治の道へ

貧困にあえぐ漁村を救うため、1人の青年が立ち上がった